

広島大学における動画作成支援サービスの実績と提言

北川和英¹⁾, 秋元志美²⁾, 坂森育美²⁾, 隅谷孝洋²⁾, 三原修¹⁾

1) 広島大学技術センター

2) 広島大学情報メディア教育研究センター

kitagawa@hiroshima-u.ac.jp

Accomplishments and proposal of video production support services at Hiroshima University

Kazuhide Kitagawa¹⁾, Yukimi Aakimoto²⁾, Ikumi Sakamori²⁾

Takahiro Sumiya²⁾, Shu Mihara¹⁾

1) Technical Center, Hiroshima University

2) Information Media Center, Hiroshima University

概要

広島大学情報メディア教育研究センターでは、2008年より編集を伴う撮影と配信を行ってきた。筆者自身は2012年より技術職員としてこの業務に参加し、現在11年が経過している。ここでは現在までの取り組み内容を報告するとともに、課題とそれに向けた提言を紹介する。

1. はじめに

広島大学情報メディア教育研究センター(以下「IMC」という)では2012年より、それまで行ってきたe-ラーニング支援に加え、教育用動画コンテンツ作成支援^{*1}と著作権処理支援^{*2}を開始した[1]が、当初の利用者は学内でも限られたものであった。しかしながら現在は、ほぼ全ての組織等に対して支援しており、ここに至るまでの経緯について簡単に紹介する。

2. サービス内容

当大学における動画作成のフローチャートについて、図1に示す。

利用者は、IMCの専用ページより申し込みを行うこととなっている。申し込み後、IMCの受付担当者は編集及び撮影を担当する技術センターと人員の調整をした後、申込者との打ち合わせを行う流れとなっている。打ち合わせは受付担当が行う場合もあるが、撮影若しくは編集を担当する者が申込者で行う場合も多い。

撮影はIMCの常勤スタッフ2名および技術センターの職員2名で行い、編集はIMCの常勤スタッフ2名および技術センターの職員1名で対応している。また著作権処理を担当する者も1名IMCに常在し、撮影・編集と同時進行の形で作業を実施している。

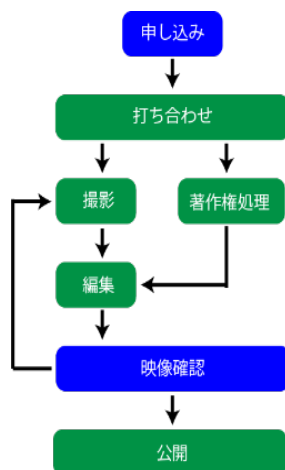


図1. 動画作成支援サービスの流れ

^{*1}<https://www.media.hiroshima-u.ac.jp/services/edu-sys/video/>

^{*2}<https://www.media.hiroshima-u.ac.jp/services/edu-sys/copyright/>

表 1. 現在までの納品実績

年度	申込件数	納品本数
2012	8	14
2013	14	43
2014	24	193
2015	36	262
2016	75	558
2017	68	833
2018	71	850
2019	81	571
2020	92	290
2021	124	260
2022	110	254
2023	75	398

3. 申込内容の傾向と納品実績

現在までの IMC への申し込み状況と納品実績を、表 1 に示す。

2012 年から 2013 年ころは学内講習会、シンポジウムなどの映像が多かった。

2014 年から 2019 年にかけては、講演会、学内講習会といった定型映像(図 2 参照)のほか、工学部、医学部などから授業公開のための処理を多く依頼されるようになった。

この期間の、2015 年。外注では学内に技術が残らないことを危惧された当時の副学長の意向に

より、この年から開催されることになったイベント『未来博士 3 分間コンペティション』の撮影と編集業務を依頼されるようになった。

2018 年には医学部教員より研究にかかる映像の作成を依頼され、また、2022 年には論文に添付する動画の編集依頼もあった。

2020 年、コロナの流行により主に学内向けの映像製作中心であった業務内容が大きく変化した。特に授業公開に伴う依頼は、対面授業がなくなったため、教室授業の録画を配信できるように登録する支援業務がほぼなくなった。逆にそれまであまり依頼がなかった学外向け映像、殊にオープンキャンパス映像の製作をはじめとしたコマースに類する映像作製が多く依頼されるようになった。例として挙げると、授業補助のためのシミュレーション動画(アニメーション動画を含む)の作成、高校生向け研究紹介インタビュー映像の作成、学生によるオペラ公演及び定期演奏会の動画製作、官庁への提出動画の製作、研究会など使用する映像の画像処理などといった、今も行われている作業を依頼されるようになったのはこの頃からである。

4. 作業内容

撮影では、納品される映像内容の要望をクライアントから聞いたうえで詳細を検討し、カメラの使用台数と必要器材を決定している。

単純なスピーチ映像の場合は 1 台、インタビュー映像の場合は 2~3 台のカメラを使用している。撮影時には、可搬型モニタを接続することで演者

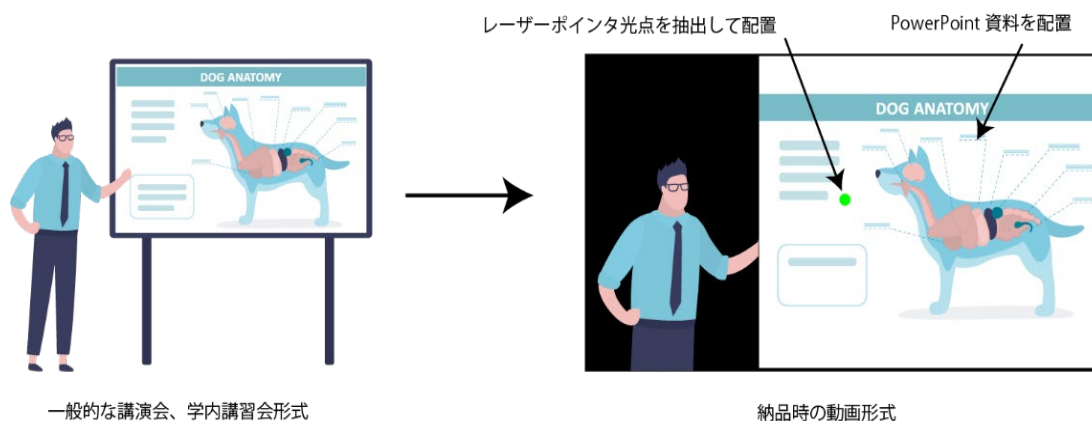


図 2 . 講習会などの編集例

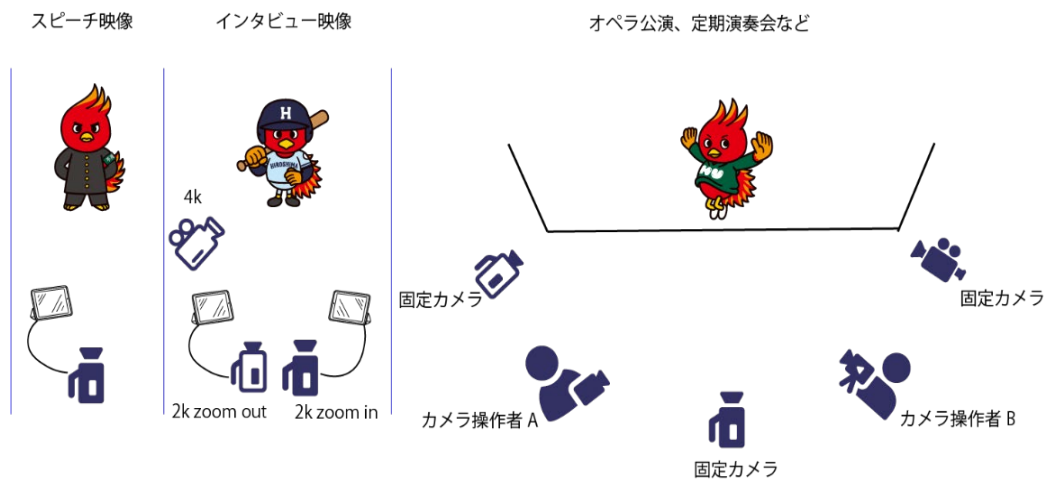


図 3. 撮影時のビデオカメラ等の配置例

自身が撮影状況を確認しつつ、ピンマイクを用いて音声を録音し、室内の雑音を極力排除するよう努めている。

3 分間コンペティション、オペラといった舞台を使用する映像の場合は 5~8 台程度のカメラを使用している。全ての撮影場面に於いて基本的には 2k 保存設定による撮影を行っているが、状況に応じて 4k 保存設定で撮影を行い、編集時の選択肢を広げている。(図 3 参照)

映像編集に使用するソフトウェアは、Adobe 社の動画編集ソフト Premiere Pro を中心とした Creative Cloud 製品を使用している。

昨今は利用者も様々な動画を目にする機会が多いことから、開幕映像、動画内の演者紹介などに Lower Third などの目を引く表現を要求されることも多い。こういった要望に応えるため、After Effects を用いた動画素材の作成を行っている。

動画の公開形式については、納品映像は YouTube で公開されることが多いことから納品形式は 1080p が多いが、moodle などのオンライン学習システムなどに登録される場合は 720p で納品を行っている。

一本当たりの作業時間については、単純なスピーチ映像などの場合は 1~2 時間程度の作業で納品している。

2~3 台のカメラを使用するインタビューなどの映像の場合は、一本当たりの製作時間は 0.5~2 日程度である。

しかし、3 分間コンペティション、オペラ、定期演奏会などの 5~8 台のカメラと音源を使用したうえ、さらに多くのタイミング調整を要する複雑な編集をする案件では、それぞれ 1~2 か月程

度の作業時間を要する。

5. 課題から提言へ

大学における撮影には、病院内の着替えを必要とされる場所といった、外部業者が敬遠しがちな案件がある。また、細胞を扱う実験室内においては一定の配慮を求められるとともに、音声などの録音を行うには騒々しい場所もある。

編集を行う映像は、我々が撮影する素材のほか、撮影経験があまりない教職員、学生が撮影した素材を用いることもある。我々が撮影する映像は一定の品質を保てるが、持ち込まれる映像には手振れ映像をはじめとした、撮影時にトラブルが生じた素材もあり、これに対応する必要がある。

著作権担当者の指示により、著作権にかかる映像処理、名前などの個人情報の保護に関する映像処理を行う必要があることも多い。また依頼者の要望により、一般的ではない技術を用いて画像処理を行う場合もある。

こういった、時によっては個人の知識では対応しきれない可能性がある場面において、経験者から知識を得ることは有用と考える。

筆者は残り 2 年で定年を迎えるが、現時点では後任補充の予定はない。また編集を共同で行う技術職員も不在であり、映像関係の業務に携わる予定の職員の配置も計画されていないため、数年後には培ってきた知識が大学から消えることになるのは非常に寂しいと考えている。

SNS などを活用して各大学の実務担当者による横の繋がりを強化し、編集における疑問点のほか、撮影における注意事項と技術内容を自由にや

り取りできるとともに共有できる場所を構築できればよいと考えている。

参考文献

- [1] 隅谷孝洋, 秋元志美, 藤田美恵, 原田久美, 北川和英, 三原修, 寸田祐樹, 村上義博「広島大学における動画コンテンツ作成支援」大学ICT推進協議会 2015 年度年次大会論文集 3D3-4, 2015